

図書館報



CONTENTS

特集 近郊の博物館

- 大牟田市石炭産業科学館・熊本県立装飾古墳館 2~3
読書のすすめ 4
新刊書紹介 4~5
留学生が語る“図書館” 6~7
読書感想文コンクール 8~14
 入賞者 8
 入賞作品紹介 9~14
 審査を終えて 14
図書館統計 15
郷土の文化財・編集後記 16

有明高専

Vol.8 2002.12

特集

近郊の博物館

大牟田市石炭産業科学館



“黒いダイヤ” 石炭

どんなところ……？

大牟田駅から車で5分。諏訪公園を過ぎて海風も感じられる広大な敷地に、まるでUFOが着陸したかのような建物が立っています。晴れた日に自転車で行ってみると気持ちがいいかもしれません。1995年7月大牟田市によって設置され、石炭の歴史だけでなく、石炭を含めたエネルギーの現在・未来についても目を向いた施設になっています。



円盤型UFO？

どんなものが楽しめる……？

導入展示では巨大な石炭層が再現され、常設展示は①：石炭と大牟田の歴史、②：エネルギー体験学習、③：地球と石炭の関わり、④：石炭百科の4つのテーマを設定して様々な模型・写真・映像を紹介しています。なかでも閉山当時の坑内の様子を再現した模擬坑道は圧巻です。炭鉱でどんな機械が使われていたかを知ると本当に驚いてしまいます。またエネルギー体験学習では遊びながらエネルギーについて楽しく学習できます。このように石炭・炭鉱・エネルギーについていろいろな形で見、聞き、触れる事によって認識を深める事ができる施設です。



〒836-0037 福岡県大牟田市岬町6-23 TEL 0944-53-2377
Home Page <http://www.sekitan-omuta.jp/>

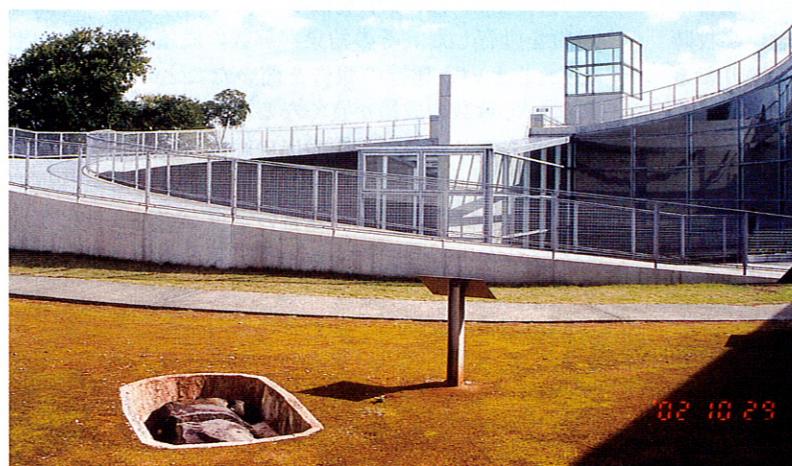
熊本県立装飾古墳館

そもそも装飾古墳とは……？

古墳の内側に、文様が描かれている古墳。全国に641カ所あり、そのうち熊本県が186カ所を占めている。畿内にあるものは石を白く塗ってから模様が描かれているのに対し、九州・熊本地方では石に直接彫ったり、描いたりしているのが特徴ということだ。



色鮮かに 復元されている



古代の入口へと続く道

どんなところ……？

熊本アートポリスプロジェクトの一環として、現東京大学教授の安藤忠雄氏により設計された建築物で、ガラスをふんだんに使っており、外光・外景も楽しめる。

それは、国指定の遺跡である双子塚古墳と同じ前方後円墳のような形にも象徴され、その「前方」部分から高台に上り古墳群を一望した後、「後円」部分で石棺のまわりを歩きながら入館口へと誘っている。まさに、時空的な移動を体感できる建物を感じました。

どんなものが楽しめる……？

駐車場に車を止める。そこには博物館らしき建物は見えない。案内板に従って、鬱蒼とした森の小径を歩く。

静けさが、古代へとタイムスリップするかのようだ。大きな石人像が見え、階段を登ると、ようやく装飾古墳館の建物が現れる。それでもまだ入口らしきものは、見あたらない。という具合に入館まででも十分楽しめるところです。

展示物は菊池川流域を中心とした原始・古代・中世の主要遺跡と出土遺物など。特に、装飾古墳室では、実物大で正確に古墳の中の様子を再現している。古墳は、発見されて調査した後、保存措置が行われたり、埋め戻したりされるので、直接は目にすることができないことが多い。しかしここでは実際に古墳の中での感覚が味わえる。また、古代の生活を立体映像で放映する「イマジネーションホール」などを備え、勾玉づくりや火起こしなども楽しめる体験型の博物館でした。



石人像がお出迎え



〒861-0561 熊本県鹿本郡鹿央町岩原3085番地 TEL 0968-36-2151
Home Page <http://www.pref.kumamoto.jp/construction/section/kofunkan/>

読書のすすめ

校長 尾崎龍夫



第7号に掲載された読書感想文コンクールの入賞作品を読んだ。いずれも、自分で選んだ作品を熟読し、しっかりと自分の心に向き合い、思いを深めた力作で、大いに感動した。

私は、小学生時代から読書が好きではあった。中学、高校時代は、自由に書庫に出入りできる特権があるので、図書部に所属した。冒険小説、探偵小説、活劇小説、伝記小説など少年向け読み物から始まり、大衆小説、日本文学、外国文学へと、ジャンルを問わず多読、乱読した。大学に入った頃は、「戦争と平和」や「罪と罰」など長編文学に、好んで挑戦したが、速読に終始し、熟読して感想文を書いたことはないように思う。それなりの読後感はあったと思うのだが、それがどのようなものであったのか、40年以上経た今全く思い出せない。一冊の書で人生が変わることがあることを思えば、誠に残念なことであったと反省している。本校で取り組んでいる読書感想文コンクールは、多くの学生諸君にじっくりと自分に向かい合う機会を提供するものとして、高く評価したい。

先日、ある新聞のコラム欄で、次のような記事が目についた。「最近は、脳表面温度を計測することによって、脳の働きを知ることができるようになった。

ゲームをしている時は、脳の狭い領域しか働いていないが、読書している時は、広い領域が働いている。」ゲームでは、目で画面を追いながら、指先をいかに早く動かすかということだけに集中すればよい。しかし、読書では、目で文字を読みとりながら、想像力を働かせたり、考えたり、感動したりするからであろうか。また、以前、「ある小規模小学校で、毎朝、短時間の読書を励行した。その結果、算数の成績が大幅に向上した。」という趣旨の報告を聞いたことがある。読書によって算数の成績が良くなるというのは、奇異に感じるかも知れないが、脳の広い範囲を繰り返し刺激することによって、全体の働きが良くなると考えれば納得できよう。学生諸君に読書の習慣をつけることを勧めたい。ショートホームルームで試みるのはいかがであろうか。

私が本校に赴任して7ヶ月になろうとしている。その間、当地でいろいろな出会いがあった。その一つに月曜会がある。毎月一回、月曜日の夜3時間程、古典を読む会で、10年前に始まったそうである。メンバーは、企業の役員、病院長、高校の校長や元校長など多彩な顔ぶれである。3月程前、ある集まりの時勧誘され、9月、10月の2回参加した。今は、「史記」の一節と「古事記」の一節を講読している。高校時代以来ご無沙汰していた漢文に戸惑いつつ、老化防止の一助になればと、しばらくは頑張ってみる積もりである。

新刊書紹介



工学のための有機化学

荒井貞夫著 (サイエンス社)

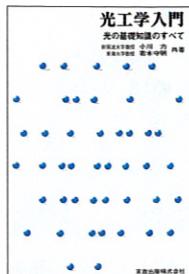
有機化学が苦手な学生諸君もいることでしょう。私たちは日常生活で、有機化学と何らかの形でかわり合っている物を多く使っています。そこで、有機化学の理解を深めるため、何故そうなるのかの理屈をわかりやすく図表などを多く用いて解説されています。一度読んで見て下さい。



脳に磨きをかける必須脂肪酸

中川八郎著 (化学同人)

魚をよく食べると「頭が良くなる」とか「長寿である」などと言われています。特に魚の油脂の主成分であるDHA(ドコサヘキサエン酸)、EPA(エイコサペンタエン酸)が最も関与しているようです。このような必須脂肪酸を「どのように」「どれだけ」とればいいかを含めて、最近の知見を一般人向けにやさしく解説しています。一度読んで長生きしてみてはいかがですか。



光工学入門

小川力、若木守明共著（実教出版）

光の性質は現代物理学理論の根底にかかわる重要な事項であり、有史以来、波動説と粒子説が歴史的大論争を繰り返してきた。光のこの二重性が正しく認識できるようになったのは20世紀になってからであり、現代物理学では波動としての古典論を含んでの量子論的記述が可能となったが、日常的に経験する範囲では古典論的取り扱いで十分であり、明快な光学理論が役に立つ。本書はこのような観点に立ち、現代における科学としての光工学を、光学の歴史から説き起こし、光の発生、性質、相互作用から応用、さらに進んで光工学の未来に関する、教育と研究の場で得られた経験と蓄積を基に記述されている。



Spiceを使った電子回路設計工学

黒瀬能幸、岡田和之共著（森北出版）

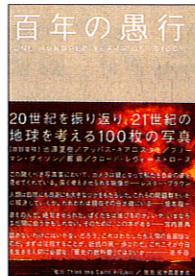
電子回路は、電子工学の基礎科目ですが、なかなか難しいものです。技術者は、どの分野であれ設計能力がなければなりません。設計といえばCAD（Computer Aided Design）という言葉が思い浮かびますね。CADというのは、人間の持つ優れた設計能力と、コンピュータの持つ長所をうまく組み合わせて、社会に要求される製品の開発を短時間に行う、すばらしい道具です。この道具を学習に利用しない手はありません。本書は、世界的に有名なPSpiceという回路設計CADを用いて電子回路を学べる本です。正式版のソフトはとっても高価なのですが、この本では無料で入手できる評価版を用います。評価版を使用していても、高専（大学）レベルの電子回路の学習に支障はありません。パソコンを持っている人は、ソフトを入手して試してみて下さい。持っていない人は、学科の担当の先生に相談して下さい。



日本人とすまい

上田篤著（岩波新書）

本書は住居を構成する屋根・柱・壁・戸・窓など24の部分に関するエッセイ。歴史的現象、西洋との比較を通して、住居についての問題点などを指摘。約30年前に出版されたものであるが、指摘されている事柄の中には示唆に富むものも多い。面白く、容易に読める本である。建築学科工学基礎IIの参考書。



百年の愚行

(Think the Earth プロジェクト)

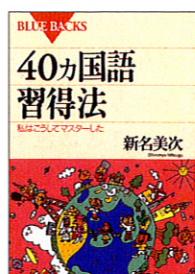
20世紀の初め、世界の人口は約15億だったと言われている。それが現在、約60億である。この100年で4倍になったことになる。どうしてそのようなことが可能であったかと言えば、それは科学技術の発達のおかげである。この100年の科学技術の発達は目覚しいものがある。しかし、科学技術は負の遺産も残した。それは環境破壊である。科学技術が持つ陰の部分は数々の「愚行」のオーバーラードである。しかし、「愚行」の最たるものは戦争であろう。20世紀は戦争と紛争と殺戮の世紀でもある。環境破壊であれ、戦争であれ、貧困であれ、人間が引き起こす「愚行」の数々を迫真的写真で紹介したのがこの本である。これらの写真を直視して、21世紀はどうあるべきかを考えて欲しい。



こんなときどうなる 「有罪」VS「無罪」

上野勝著（日本文芸社）

身边に起きている出来事についての不平や不満を解決する一つの手段として存在する法律。知っての通り、最初は聖徳太子が制定した17条だけで始まったんですが、社会は人が営んでいるわけですから、変化してだんだんと複雑怪奇になり、条項も増えてきました。その法について、生活を快適に送る自分のためにも、ちょっとだけ知識を増やしておきたいものです。さて、友人に貸していた自分の自転車を無断で持つて帰る行為は Guilty or not guilty ?



40カ国語習得法 -私はこうしてマスターした-

新名美次著（講談社ブルーバックス）

外国語と言えばすぐに英語を思い浮かべる人、是非ともこの本を手に取ってみて下さい。インパクトの強烈なとしても刺激的で挑発的な本で、知的好奇心を大いに刺激してくれます。灯台下暗し。英語に触れることによって、今まで無意識に使っていた日本語の面白い特徴に感激した人もいるはず。様々な外国語に触れて日本語だけでなく英語の面白再発見もできるかも。著者の実体験に基づく役に立つ話もたくさんちりばめられています。まずは、最近燃えているアジアのことばに触れてみませんか。

留学生が語る “図書館”

私の国の図書館



5年 物質工学科
Lila Kurniasari
(インドネシア)

母国インドネシアでは、公務図書館が2種類あります。一つは、一般公務図書館といい、普通の日本の図

書館のようなもので建物の中にあり、場所が定められています。一方、もう一つは移動図書館といい、車を利用して町や村の奥まで国民がより多く読書することができるよう作られた図書館です。この図書館は週に1~2回程度町の公園や運動場の近くにやってきます。車が入れない場所（川の近くにある村など）には小さな船を使用し、移動図書館がやってきます。子供や学生に大変人気があり、多くの人々が読書を楽しんでいます。

私の国の図書館



5年 電子情報工学科
Tan Meow Cheng
(マレーシア)

マレーシアでは、色々な図書館がありますが、ここではある大学の図書館について紹介したいと思います。この図書館はソータナザナリア (Sultanah Zanariah) 図書館と呼ばれ、1972年に建てされました。ソータナザナリアは昔の王様の奥さんの名前だそうです。この図書館は5階建てで、1,000人を収容することができます。祝日以外は、土日も開いています。

図書館の入口の前に、テレビ室があり、ここに色々な雑誌や新聞が置いてあります。ここは、大学生の交流スペースとも呼ばれています。見たい映画があれば、図書館スタッフに申し出たら、上映してくれます。入口では、盗難や無断持出を防ぐため、センサが設置されています。この図書館は民間の人も利用できます。しかし、利用するためには、図書館カードが必要となります。この大学の学生であれば、自分の学生証が図書館カードの代わりになります。学生証にバーコードがついているからです。

この図書館の蔵書数はよく分かりませんが、英語を

はじめ、いろいろな言語、例えばマレー語、中国語、タメル語（インドの言語の一つ）などの本がいっぱい揃っています。もちろん、検索システムも準備されています。利用者が一度に借りることのできる冊数は12冊以内です。

私が日本に来て嬉しかったのは、返却期間内に本を返さなくても、罰金を払わなくてよいことです!!マレーシアの図書館は、とても厳しくて、返却が遅れたら、罰金を払わなければなりません。金額は日本円で1日につき8円~40円です。私は何回もひっかかりました。

本のほかに、カセット・ビデオ視聴覚室、コンピュータ室、ディスカッション室などの設備も用意されています。コンピュータの利用者があまりにも多すぎるので、30分以上利用する場合には、わずかな料金がかかります。教材のカセット・ビデオの貸出もできます。必要な場合には、ダビングも許されます。

図書館はかなり厳しく管理されているので、とても静かです。原則を守れない人は、厳しく注意されます。

マレーシアには、イスラム系、中国系、インド系の人々が住んでいます。それで、公共の図書館に行くときは、イスラム教の人々の信条に配慮して、皆は肌を露出したセクシーな服を着て行かないようにしています。

Chicken Soup For The Soul



5年 電気工学科
Jay dela Cruz
(フィリピン)

The title might mislead you, but this article is not about food but about a book. For me this is one of the best books I have read. It is a compilation of stories that talks about friendship and love, the importance of belief in the future, the value of respect for yourself and others, and dealing with tough issues like death, suicide and the loss of love. Everyone can talk about and learn a lot of things from the stories written in this book because all is reality. I

guarantee you that this book will become your good friend. This book will understand your feelings, will be there when you need, and will cheer you up when things are not good.

Chicken Soup for The Soul was written by Jack Canfield, Mark Victor Hansen and Kimberly Kirberger. Jack Canfield and Mark Victor Hansen are the No.1 New York Times bestselling coauthors of the Chicken Soup for the Soul series while Kimberly Kirberger is the managing director of the Chicken Soup for the Soul organization.

I greatly believe that this inspirational book will be a big help to people of all ages. I hope that a Japanese translation of this book would come out sometime because this book is really of value to read.

私の家の近くにある図書館



4年 電子情報工学科
Le Phuong Thuy
(ヴィエトナム)

それは大学の図書館です。朝7時から午後5時まで開いていて、日曜日と祝日だけ休みです。図書館は二つに分けられていて、一つは4・5年生しか入れない

所で、研究のために自由に参考書を探すことができます。もう一つは4・5年生以外の学生向きの所です。ボックスの中にある本、作家の名前や内容のまとめから借りたい本の番号をカウンタで注文します。そこは何か特別なものもなく、いすと机だけあるのですが、静かでまわりの人たちが一生懸命勉強しているのを見て、自分も勉強したいという気持ちが出て来ますので高校生もよく来ています。私も高校の卒業試験のためにその図書館で勉強しました。やっぱり図書館の雰囲気のおかげでよく勉強できたと私は思いました。

読書



3年 物質工学科
Ronnachai Klangnarong
(タイ)

読書とは人間形成や、人格形成に深く反映する。知識のあふれた書物を開けば、それらの知識に触れ、得ることができる。知識だけでなく、著者の心情までも

込められた書物に触れれば、豊かな心を感じ、味わい楽しむこともできる。我々はさまざまな本を読むことによって、さまざまなことを本より学ぶことができる。人生の中で重要な選択を迫られた時に、これまで読んできた本がきっとすばらしい道を示してくれるに違いない。もしかしたら、人生をそっくり変えてしまうこともあるかもしれない。

さらに、本さえあれば、バスや電車などを待つとき、また、車内でも有意義な時間を使えるのがうれしい。

校内読書感想文 コンクール

本年度の「読書感想文コンクール」には昨年度より23編多い635編が寄せられ感謝している。いつものことながら4・5年生の応募が少なかったのは残念である。そんななかにあって、5年建築科が全員応募してくれたのは特筆に値する。

簡単に選考の経過を記す。635編の中から担任の先生に各クラス5編を目途に選んでもらい、全部で90編が寄せられた。その90編について、選考委員が手分けして3年以下については各学年10編、4・5年については5編を目途に選考して35編を選出し、その35編について選考委員会で協議して、本年度の受賞作品を選んだ。

審査しながら感じたことであるが、本年度は例年になく、レベルの高い選考になった。実際のところ、甲乙つけがたい作品が多く、委員泣かせであった。まさにうれしい悲鳴である。学生諸君の作文力、読解力が

あがったものと思われる。

フランスの哲学者・デカルトに「吾思うゆえに吾あり」という有名な言葉がある。この言葉の意味は、自分が存在するから、考えることができるのでなく、考えることができるのであるから、自分が存在していることを認識できる、ということであろう。作文についても、この言葉は当てはまるのではないだろうか。つまり、頭の中にある考えがあって、それを作文にするではなく、作文することによって、自分の考えが形をなして行くのである。思想というものは、文章にして初めて、言葉にして初めて、思想になるのである。これからも、機会あるごとにいろいろなことについて文章にしてください。言葉にしてください。そうすることで、自分の考えを自分のものとして行くよう心がけてください。

(図書館長 濑戸 洋)

入賞者

■最優秀賞

物質工学科 1年 山本 弓 「沈黙」を読んで

■優秀賞

電気工学科	5年	立山 茂憲	今だからこそ先人に学ぶべき
建築学科	3年	吉田 沙織	「風立ちぬ」

■佳作

建築学科	3年	渋田 泉帆	「人間失格」を読んで
建築学科	3年	東 優子	「海と毒薬」を読んで
2年1組		山口 可菜	「十七歳」
電気工学科	1年	氷室 貴大	「金閣寺」を読んで
電子情報工学科	1年	芦馬 慶美	「人間失格」を読んで
物質工学科	1年	坂口 陶子	「夏の庭」を読んで
物質工学科	3年	山下 祐司	「十七歳」を読んで
2年1組		豊福 大騎	「風立ちぬ」

入賞作品紹介



「沈黙」を読んで

1年 物質工学科
山本 弓

興味があるものの、感となると敬遠がちになってしまう作品。私にとってそれがキリスト教作家としての遠藤周作の作品だった。著者と、キリスト教には一切無縁だった私の死生感がありにも違うからか。或は、私の一部の偏った信仰心からくる罪悪感のせいか。

ところが、『沈黙』を読んで驚いた。無論挫折感に襲われる覚悟だった私は、最後には背教してしまうロドリゴの気持ちも、日本人信者達の気持ちも理解できるような気がしたし、何度も簡単に転び、ついには司祭であるロドリゴまでをも裏切るキチジローの姿に、なぜか憐憫の情が胸を突き上げた。宗教こそ違うが、信仰心のおかけだろう。そして、これは唯一にして最大の著者と私の共通点だった。

この小説の表面を流れるストーリーは、簡明率直なものかもしれない。しかし、嘗て私をこれほどまでに悩ませ、苦しめた小説はなかった。背後にある小説のテーマは「神は果して存在するのか」。私はこの本を読んでから、殉教したモキチとイチゾウの言葉が頭から離れない。「なんのため、こげん責苦ばデウスさまは与えられるとか。わしら

はなんにも悪いことばしとらんとに。」誰が死のうと苦しもうと、裏切ろうとも神は沈黙を守る。私も昔、自分の体に障害が残ると分かった時、病院のベッドの上で同じようなことを考えた。そう、私達は神の存在を疑つたのである。

私はたまに、自分の中から信仰心が消え去るのではないかという不安に襲われる時がある。ロドリゴや信徒達にとって、恐しいものは迫害や拷問などではなく、神の沈黙だった。しかし、本当に恐かったのは、神への不信感から自らの信仰心が薄れて、自分を見失ってしまうことだったのではないだろうか。

『沈黙』での、私が途中何度もその存在に自分を垣間見たキチジローの姿は、イエスと神を裏切ったユダに重ね合わされている。信仰においても、または別のことにおいても、腑甲斐無い自分を私はキチジローの中に見たのかもしれない。著者は、『沈黙』について「自分の母への裏切りを投影して書いた」と語っている。著者もまた、自分の弱さをキチジローに重ね合わせたのかもしれない。

ここに著者の言葉がある。「強い者も弱い者もないのだ。強い者より弱い者が苦しまなかつたと誰が断言できよう。」不意にユダがキリストを裏切った後、自殺したことを思い出し、この時やっとキチジローの本当の苦しみを理解したこと気に付いた。自分の弱さも忘れて、キチジローを軽蔑していた自分がいた。情けなくて恥ずかしくて仕方がなかった。この世には強い者など存在しない。そうロドリゴが気付いた時、私のそれまで築き上げてきた価値観や人を見る目は崩れ去り、新しい自分を出発させようと心に誓った。

験も乏しいので、現在戸惑うのも仕方がない。よって今だからこそ昭和の大成功の歴史を悪い面だけでなく、良い面としても教訓にすべきではないだろうか。

本田宗一郎氏は能力主義や個性的な製品作り等、現在にも通じる事を昭和20年代には主張しているのが手紙から読み取れる。今読むと感心できるが、当時は相当な変わり者の扱いを受けたのだろうと推測できる。実際に本田氏が社会に認められるまでホンダの経営は苦しかったようだ。しかし、本田氏は経営難でも、軌道に乗った時でも共通しているのが、ホンダで働く従業員を大事にし、その可能性を常に信じている。ここは、読みながらまるで本田氏が自分の子供に送った手紙のように思えた。私は、これこそが現在もホンダが進化し続けている最大の要因ではないかと思う。堕落していく企業では、従業員はまずコストダウンの対象となる。これは企業が、従業員を採用するという事を軽視しているという面があるのではないか。本田氏は、社員に向けて驕りを戒める手紙、失意を励ます手紙、仕事をするに当たっての手紙等、25年にも亘って社内報に書き続けた。それは、本田氏が従業員を愛した証拠であり、ホンダが従業員を大事にする証拠であると思う。

本田氏の手紙の内容は、笑ってしまうようなユーモアに富んだもの、指摘されて私自身思わず考え込んでしまったもの等、様々であった。しかし、どれも会社のためではなく読者個人への愛情の込もった手紙だった。本田氏のみならず、昭和を生きた経営者の人々には学ぶ事がたくさんあるはずだ。日本経済の将来のために、彼らの業績を今こそ見直すべきだと改めて強く思う。



今だからこそ 先人に学ぶべき

5年 電気工学科
立山 茂憲

私は、学生最後の夏休みに『本田宗一郎からの手紙』という本を読んだ。私は氏が、その人柄や思想ゆえか「世界のホンダ」を創設した社長としての存在に留まらず、技術者として、果ては社会人としての生き方を故人となった今でも、多くの人が参考にしていることに大きな尊敬の念を持っている。よって私は、社会人になる間近のこの夏休みにこの本を読むことに決めた。私は本田氏より、手紙を受けとったのである。

最近の10年間を振り返ってみると、バブルの崩壊によりそれまでの日本の経済の価値観が崩れ去り、あれ程特異なものと見られていたリストラや大企業の倒産が今では日常の出来事になった。もちろん、倒産を防ぐため企業は改革を行っているが、需要がないのでコストを下げるしかない、という短絡的な考えに基づいた人員の削減や海外生産等、その場しのぎ的な方法を用いている企業が多く、それが常識になっていることに私は日本の国自体の将来に危機感を持っている。ここで重要なのは、「温故知新」を忘れるべきではない、という事だと私は思う。日本経済、と立派に呼べるようになってまだ50年も経っていない。大不況の経



「風立ちぬ」

3年 建築学科
吉田沙織

「生」と「死」。自分の死は生きている以上経験できない。しかし、人の死を見届けることはでき、人の死の後も自分は生きていかねばならない。そんな当たり前だと思っていたことを考えさせられる作品であった。

この作品は、作者である「堀辰雄」が実際に経験した出来事をもとに書かれたものである。主人公の婚約者である節子は、結核のため療養所で生活することになり、主人公も一緒に療養所で暮らすことを決める。節子の病気は思っていたより重かった。しかし、主人公は治ると信じたかっただし、節子も主人公と共に生きていこうと思ったにちがいない。節子に生きる力を与え、支えていたのはもちろん主人公だろう。節子が死の気配を感じながらも、生きたいと思ったのは主人公との幸せな未来を夢みていたからだと思う。また、そう願う節子の表情や言葉が、主人公にも生きなければならないと思わせ、主人公を支えていたように思う。「風立ちぬ、いざ生きめやも。」主人公がよく口ずさんだこの詩句は、節子に対する想いだけでなく、自分自身に

言い聞かせていたのかもしれない。

季節の移り変わりと共に節子の病状も徐々に目に見えて悪くなっているようだった。切なく、しかし楽しく幸せな日々は、つかの間であった。節子は死んでしまう。この時の主人公の悲しみははかり知れなく大きいだろう。また、節子も想う人と離れる寂しさがあったと思う。お互いに失って初めてわかる想像を超えた深い悲しみがあったのではないだろうか。

節子の死後、主人公は小さな谷の別荘で一人で暮らし始める。もうそこにいるはずのない節子の気配を感じたり、節子の表情を想像することが、苦しいほどできた。主人公は自分の人生が自分が思っていたよりもっと大きなものなのではないだろうかと気付き、節子に愛されていたからこそ今自分が存在していると考える。この節子の死によってこれまでの人生を見つめ直し新たなスタートを切ろうと思ったにちがいない。また、この主人公は作者自身である。作者は、節子への想いから再スタートをし、気持ちの整理をするためにこの作品を書いたのではないかと思う。

「生」と「死」。残された人は、生きなければならない。大切な人の死は、とても悲しい。しかし、そこで立ち止まることなく未来へのスタートを切って進んで行くことが、残された人のすべきことなのかもしれない。私は、「生きる」ことは、自分だけでなく周囲にも影響を与え、また与えられて存在していて、一人で生きているのではないことを改めて実感した。



「人間失格」を 読んで

3年 建築学科
渋田泉帆

人間、失格。

もはや、自分は、完全に、人間で無くなりました。

一人の男の一生を綴ったこの小説で、「人間」というものがどれだけ無力であわれな存在であるかを認識させられた。主人公、大庭葉藏。彼の心の中は、人間不信からくる疑心暗鬼であふれ、家族にすら疑いの心を持っていった。

そんな状況から抜け出すため、彼自身考え出したのが道化である。しかし、道化をすることで、人間に対する不安や恐怖は治まったのだろうか。いや、いつ周りの人間に自分を見破られないかと、落ち着きのない行動を取っていくのだった。本当は誰しも他人の機嫌をとったり、自分自身を他人に良く思われるために善を見せようしたりして、他人や自分を偽ったりしたことが、長い人生の中で一度と言わずあるのではないか。

この本を読んで、まず「人間失格」とは何のことだろうかと思った。作者は自分自身のことを指摘しているが、どこからどこまでの範囲を「人間失格」というのだろうか。精一杯、自分なりに生きるのは「人間失格」とは言えない

のではないか、などと複雑な疑問が脳裏に浮かぶ。

彼の人生は、本当に波瀾万丈なものだった。酒、煙草、淫売婦といった、恐怖を一時的に紛らす事のできるものに溺れ、一緒に心中しようとした女だけ死んでしまう。家族の彼に対する態度は天地をひっくり返したようにうつて変わり、冷たくなった。彼は愛しい人を失い、そして家族をも失い、さらに、信じるもの、今まで自分を支えてくれたものまで失ったのだと思う。

「自分は神にさえ、おびえていました。地獄は信ぜられても天国の存在は、どうしても信ぜられなかったのです」という彼の気持ち。人間そして神にもおびえ、生きる物すべてに脅え、いったい何を信じ、何を支えとして生きていけばよいのだろうか。胸の詰まるような思いがした。

幾年か過ぎ、彼はヨシ子という女性と結婚し、やっと幸せをつかむことができたかと思ったが、そんなに幸せは側を離れず居座っていることはなかったのだ。ヨシ子の彼に対する裏切りである。その後、彼は注射液のモルヒネにはまり、次第に中毒者となってゆく。病院に入れられ、罪人が狂人ということになった。

「人間失格」—だれもが嫌うこの言葉を、狂人、いや、魔人となった自分自身に呟きかけたのである。人間に対し、愛すること、信じることを求めようとし、そのために人間社会から葬られてゆく。そんな作者自らの死を、ただの死として片付けてよいのだろうか。一生懸命、彼なりに生きた人生は、そんなに安っぽいものではなかったように思う。



「海と毒薬」を 読んで

3年 建築学科
東 優子

2002年8月、今年も昨年に増して暑い中、終戦57年目を迎えた。広島、長崎では6、9日に原爆死没者のために平和祈念式典が行われていた。その光景を私は毎年テレビのブラウン管を通して見る。そんな時私は何とも言えない悲しい気持ちになる。確かに戦争という行為は、両国どちらが悪いとは言えない。そのことは十分わかっているのだけれど、原爆で家族を失した遺族の姿を見ると私はアメリカはひどい奴だと、知らず知らずのうちに思っていた。この本を読む前までは、『海と毒薬』この本は戦争末期のある恐るべき出来事が綴られている。九州の大学付属病院で少数の医学生と看護婦、そして医師によって米軍捕虜の生体解剖が行われたのだ。その具体的な内容は三つほどある。一つめは捕虜の血液に生理的食塩水を注入して、その死亡までの極限可能量を調査する。二つ目は捕虜の血管に空気を注入して、死亡までの空気量を調査する。三つ目は捕虜の肺を切除し、その死亡までの気管支断端の限界を調査する。

これらすべて何とも背筋の凍るような出来事である。もちろん米軍捕虜は自分が殺されるなんて思っていない。卑怯なやり方で日本人医師たちは実験を行った。私は頭を金

づちで殴られたようなショックを感じた。今まで日本は戦争の被害者だと思い込んでいた自分がいたから。

しかし、読み進めて行くと私は実験に立ち会った人たちだけが、必ずしも悪いとは思えなくなった。「みんなが死んでいく世の中」「病院で息を引き取らぬものは、夜ごとの空襲で死んで行く」そんな時代、そんな状況下でも変わらない病院内での教授間の勢力争い。みんな名譽や地位を獲得するために必死だった。そのため、日常的に貧しい施療患者を危険な新型手術の材料に利用することも多かった。よって誰がこの実験にたずさわってもおかしくない状況だったのである。実験にたずさわった少数の医師たちだけが異常者ではない。この時代の考え方、つまり多くの命を救うためなら一つの命はどうでもいいということ自体がおかしい。私は戦争という魔物が人々に取り付いていたのだと思う。

私はこの『海と毒薬』を読んで戦争というものに対する感じ方が変化したと思う。私たち若い世代はもちろん、私たちの親世代も戦争体験はない。だから残っている資料や体験者の話を聞くことで戦争のことを知る。そのことすべてはもちろん事実であるが、その一片からだけで戦争を見るのではなく、あらゆる方面から戦争を見つめることが大切なのだと思う。私は今、戦争において日本が悪い、アメリカが悪いとは言い切れないことがはっきりわかった。しかし、以前と変わらず私が思うことは戦争は人々に何もないことはないということ。この一点においては、決して変わらない。



「十七歳」

2年 1組
山口可菜

私は今、17歳である。この本を書いた作者と同じ年である。私は何年か前にこの本を手にとった事があった。でもその時は、「ふ~ん。」という感じで終わる。しかし、私が17歳になった今、この本を思い出し強く読みたいと思った。私と同じ17歳の女の子が17歳という年をどんな風に感じて、どうすごしているのか、興味があった。

この本を読み始めて間もなく、私はこの本の作者である井上路望という人物に強くひかれた。なぜなら、この井上路望さんと自分がだぶってみえたからだ。同じ17歳だからかなとも思った。でも、違っていた。同じバスケットをやっていたこともあるけど、それだけではなかった。路望さんの考えている一つ一つが、自分の考えとまったく同じだったのだ。私自身もおどろく程同じだった。そしてもう一つ、私と路望さんの似ているところ、それは精神的に弱いところ。でも周りにさえられて強くなる。私達の年頃の女の子のほとんどは、精神的に強い子はない。だから友達をたくさん作り、集団となって行動する。そうするこ

とによって精神的安定をはかる。でも私は少し違う。私は本当に心を許せる友達が少数いればいいし、女の集団行動は苦手だ。ベタベタ、ドロドロの関係が嫌いだ。そして路望さんも同じような事を言っている。その時私は思った。もし私が今、井上路望という人物に出会えていたら、すごく気の合う友達になっていたらうなど。

路望さんは、いろいろな経験、体験をへて、17歳という人生の中で、たったの1年しかない期間で、すごく大きな人になったと思った。精神的にも強くなっているのが分かった。同じ17歳でも、すごく大人だなあと思った。そして同時に、私も負けられないと思った。

路望さんの考える、友達関係、いじめ・偏見について、大人たちへの反論、親の大切さなどを読んでいくうちに、私は勇気と元気をもらうことができた。

私の夢は、アメリカで語学を学び、世界の多くの人々と話すことだ。アメリカにはいろいろな人種の人々がいて、いろいろな違った考えをもっている人たちがいる。でも私の夢は実現することが困難なのかなと思っていた。諦めなければいけないのかなと思った。しかし、路望さんは前向きに夢実現の為に頑張っている。そんな路望さんはすごくかっこよかった。だから私も頑張ろうという気になれた。

この本を読み終えた頃、私はすがすがしい気持ちで一杯だった。何か、私の心の中にあったグチャグチャしたモノがなくなっていた。



「金閣寺」を読んで

1年 電気工学科
氷室貴大

僕は、金閣寺を直接に見たことはない。写真で見る限りでは、金一色に塗り固められた寺で、水に映るその姿が周りの木々の緑の中でひとときわ際立っている。金閣寺は、室町幕府における足利全盛期の象徴なのである。三島由紀夫の『金閣寺』はそんなきらびやかな装いとは反対のとても重い、人間の深い心理の閉塞感を表現したものだった。著者は、金閣寺を暗黒時代の象徴として捉えているようである。この作品には著者の濃縮された文学に対する美意識のようなものが感じられるが、読解力に欠く僕には少し冗長とも思える部分が少なくなかった。

「金閣ほど美しいものはこの世にない」という住職である父親の金閣寺への思いが、主人公に強く影響し、その想像の世界でしか存在し得ない「美」に主人公は心を動かされている、という話である。主人公の身体的不自由さに対する自分自身の精神的葛藤と金閣寺の美の対立を通して「美」への憧れ、妬みが心に深く浸透せざるをえない作品である。

主人公がはじめて見た金閣寺は、威丈高にのけぞってい

るだけで、何の感動も与えていない。現実とはそんなものであろう。期待すると失望することが多い。先入観でものごとを見てはならないのだ。虚心坦懃、素直な心でものを見ることができれば、きっとこの小説の結末には至らなかつただろう。しかしながら、体も弱く、駆け足をしても鉄棒をやっても人に負け、生来のどもりが、自分の世界をつくってしまっている。

人は必ず他の人より劣るものをもっている。その反面、人は必ず他の人がもっていない能力をもっている。そのことに気づかねばならない。本文中でも「自分の少年時代に、まるっきり人間的関心というべきものの、欠けていたことに私は愕くのである。」とある。この文は、父の死に対して自分が悲しんでいないことの反省に使われているが、このことが行動を起こさせた最大の要因であろうと僕は思う。

最初、登場人物の心理というものが全く理解できなかっただし、その上主人公が金閣寺のイメージに執着するのを偏見で捉えてしまった。しかし、しだいに人は誰でも自分なりの金閣寺を心に秘めているのではないだろうかと考えられるようになった。今の時代、均一化した価値観で情報も多面的になってきている。こんな時代には、きっとこの『金閣寺』の主人公のような人物は数多く存在するのではないかだろうか。少年時代の深い傷がこの青年像をつくりあげていることはまちがいない。生きていく上において、いろいろなことを受け入れられる心のひろさをもっていることが重要であろう。理想の「美」を求めるながらも、現実に生きていかねばならないことが少しあったような気がする。



「人間失格」を 読んで

1年 電子情報工学科
芦馬慶美

『人間失格』という作品を読んで、私は、本を読んでこんなにも暗く、落ちこんだ気分になったのは初めての経験でした。

「恥の多い人生を送ってきました。」という、意味ありげな文章で始まるこの作品の内容は、主人公である葉藏の物心ついたころから、今にいたるまでが描かれている単純なものですが、しかし、その中身は、とても深く、人間を信じられない主人公、葉藏の悲しく、暗い心情の動きが、とてもうまく表現されていました。物心ついた、幼いころから、人間を恐れてきた主人公。彼は、恐怖の対象である人間への、最後の求愛の手段として、自分を偽る、「お道化」という技術を身につけることになります。彼の完璧な「お道化」に、周囲の大人们はだまされ、彼は、そのだまされる大人们を、そして「お道化」を続ける自分自身を、まるで子供とは思えないくらい、実に冷めた様子で、心の目から見ているのです。彼は「お道化」のおかげで、どこへ行っても人気者となり、彼の「お道化」を、不審がる者は誰も居ませんでした。それでも彼が人生を送るうちに、彼

の「お道化」が、ニセモノの、作られたものであると気づいた人間が数人存在し、彼はその人間たちに、少なからず影響を受けていきます。画家を目指そうとしていた葉藏は、同じ画家を志す友人によって、酒や、たばこや、右翼思想などを知り、それにのめり込んでいきます。そして彼は、何度か、女性との心中を試みるのですが、いずれも失敗に終わり、彼は生き残ってしまうのです。そして、純粹に愛した女性とも理由あって上手くいかなくなり、彼はすべてに嫌気がさしてしまいます。止めようとしていた酒におぼれ、質屋通いをし、薬にも手を出し、彼の身体は体力的にも、精神的にもむしばまれていくのです。

この本を読んで、私は、何度も疑問に思ったことがあります。主人公、葉藏は、どうして異常なまでに人間を恐れていたのか、それがどうしても理解出来なかったのです。この作品を読み終えて、私は、自分なりに、その問題について考えてみました。異常なまでに、人間を恐れ、人間への求愛として、自分を偽り、「お道化」を演じて生きた主人公、葉藏。彼が、そこまで人間を恐れた理由とは、彼が、誰よりも人間を愛していたからではないでしょうか。人間に拒まれることを恐れたからこそ、人間の機嫌をとり、自分を作り、自分を演じて生きてしまったのではないのでしょうか。人間に一番愛されたがっていたのは葉藏だったのかもしれない、この作品を読んで思いました。そして、人は誰でも少なからず、葉藏と通じるものを持っているような気がしました。



「夏の庭」を読んで

1年 物質工学科
坂口陶子

私はこの本を読みおわった後に、なんて良い本なのだろうと心から思った。なぜならこの本は、普段考えることのない「死」について、私に優しい手ほどきをしてくれたからだ。

死ぬ、ということについては誰しもが一度は考えてみることだろう。しかし、この世界で私達のような若者にとってそのリアリティーは限りなく少ない。特に私などは身近な人を亡くしたという経験もなく、大病を患つたこともないため「死ぬ」という危機感とは殊更に縁の薄い人間である。

また、「死」というものは誰も知らない。知らないからこそ恐しい。その為無意識に考えないようにしているというせいもあるかもしれない。いつかは必ず死ぬことがわかっているのに、それを知っているのに向き合うのは恐い。「死」とはそんなものだと思っていた。

しかし、この『夏の庭』で子供達と一緒におじいさんの姿を観察していくうちに、私の中に「死」に対するこれまでとは違ったイメージが湧いてくるのを感じた。怖いけれど怖くない、初めからそこにある、暖かく懐かしいもの

のようなイメージだ。

「死」をただ無邪気に観察することはできなかつたが、いつそれが来るのだろうという不安と、子供達の悲しむだらう姿を頭に思い描きつつ、おじいさんと、おじいさんを観察する子供達とをどこか見守るような気持ちで頁をめくつた。

おじいさんと親しくなつた子供達は死を怖がつていなかつた。それは私の「死」に対する堅いイメージを柔らげた。だからおじいさんが死んだ時、子供達の心に絶望が生まれなかつたように、私の心も堅く強張りはしなかつた。色々な悩みを個々に持ちながらも、直面した「死」について素直に、真っすぐに向き合つていた子供達の姿が、話の終盤で何と私の救いになつたことだ。

私はもっと早くこの本を読んでいれば、と思う。それは、「死」に対して先入観の少ない時にこの本を手にとつていたなら何か変わつただろうか、と考えたからである。

だが私なりにわかったことがある。「死」はずっとそこにあること、そして「死」というゴールがあるからこそ人生を一生懸命に歩んで行けるということだ。

「死」というその姿を執拗に追い求めるのではなく、かといって見て見ぬふりもせず、「死」と共に人生を歩むこと。それは勇気がいるし、疲れることかもしれない。しかし自分が真っすぐな眼で見つめさえすれば、それは人生にとって最良のエッセンスになり得ると思うのである。

人は必ず死ぬ。当たり前のことだけど、今日から私はもう一度「死」と向かい合つていこうと思う。そうすることで、自分と自分の人生を豊かなものにしていくために。

~~~~~



## 「十七歳」を 読んで

3年 物質工学科  
山下祐司

——社会って何だ、人間って何だ……

あ、を何故「あ」と読むのかという疑問のごとき、自分の頭の中に回つてゐるこの種の疑問の数々。やりたい事、やらねばならない事、何故そうしたい、そうしなければならない、そう考えてしまう自分がここにいる。そして答えの出るはずのないこれらの問い合わせを考え続けている。それは何故……という具合に。しかし、意味のないこれらの考えの中で一つだけ、「考える自分がいる」という事だけは揺るぎなき事実である。かのデカルトの有名な言葉「コギト・エルゴ・スム」の指す意味そのものの考え方とまったく同じ見方を自分はしている。そして自分はやることなすこと全てに理由づけをしようとしているのに気付いた。だが、自分が生きている事に理由づけをしても何の意味もない。「生きて」いなければ「考える」ことはできない、そう思い至つてから、「一生懸命生きなくては」、「生きるのなら自分が楽しいと思える生き方をしよう」と考え、今、生きている。

この本を書いた路望さんは、書いた時点までの17年間「生きて」きた。その間「いいじめ」「先生」「社会」……など、いろんな事を考え、経験した。途中挫折したこともあったが、「生きる」事はやめなかつた。大切なのは「今を生きる事、自分らしく時を進んでいく事」だ。

僕と彼女の辿り着いた一つの答えは共通した点があるが、その道筋は違う。本を読んだ限りで一番異なる点と思えるのは、「経験の量」か。自分はどちらかというと小学高学年辺りから逃げることの方が多かつた。まあ、その割には断り方はあまりうまくはないのだが。それに、なぜかいじめというのも受けなかつた。さらに、勉強、特に数学や科学はほぼ趣味と化していたので、さして先生に何か言われることもなく、それまでは生きてきた。中学、高校となるにつれ、趣味の勉強がなんだか本業みたいになってきた気がしていたが、その意味を考えるようになり、そして今に至る。ごく平凡な人生を送ってきた方だろう。

人はいろんな考え方を吸収して生きていく。時には人の考えにのまれて自分を見失う事もあるけれど、それもまた経験。その中を通して自分を作つていけばいい。ただ、作る環境はある程度整えて欲しい。それは社会、大人、あるいは自分かもしれない。そして自分で変えなければ何も変わらない。もしかするとこの本は僕の中の変えようと思う心にひと握りの大きな勇気をくれたものになるかもしれない。



## 「風立ちぬ」

2年 1組  
豊福 大騎

私は病人である節子。この二人の愛のある時間の流れが、さらりと書かれてあった。

この作品を読んでいると、頭の中に何度も景色や色が浮かんでくることがある。これは、病氣のために死を近くに感じながらも、私と節子の二人で過ごせる幸福の生活とそんな生活に対する不安をうまく情景で表現してあるからだと思う。

僕は、この作品の中で特に強く心に残った文がある。「私は異様な怖れからその蛾を逐いのけようともしないで、かえってさも無関心そうに、自分の紙の上でそれが死ぬままにさせて置く」といったものである。これは節子の病氣が悪化した頃に、病室の明かりに飛んでくる蛾の様子を書いた文である。これから来る死に対し、なにもできない私と、力つきしていく節子をたとえてあり、この蛾の死に行く様が今でも、リアルに頭の中で動いている。

僕は、重い病気にかかった事も、大きなケガをした事も

ない。しかもまだ若いので、自分が死ぬという事を考えた事もなかった。しかし、絶対安静で言葉すら出せない節子の姿を読んでいくにつれ、今のこの生活は永久でない事や、なんとなく過ごしている今がいかに幸せかに、はっと気付いた。

この作品の終わり、「死のかげの谷」からは、節子を失い私一人の生活が描かれている。私は、人間どうしのふれ合いから逃げ、山奥でひっそりと暮らすようになっている。その時の私の姿は、まさに抜けがらのようであり、人間は一人では生きられないものだと深く思った。人間どうしの接触があるから人生は楽しい。一人の死から、それを失った私は、人生を風が吹くままに過ごし、生きていく意味をなくしてしまった。

人生の価値は、どのような人間と関わってきたかで変わる。相手が、いつ死が来るかわからないような節子であった私は、それでも人生を強く生きていたと思う。人間は何をするために生まれ死ぬのかを考えさせる作品だった。

人と人の関係とは、とても難しく固い。私と節子は、言葉でなく目だけで、意志を交換できる。これが猿から進化した人類の本当の姿ではないかと思った。本当の信頼の中では言葉はいらない。今の生活の中にはそんな人間関係はどこかに忘れている気がする。この作品は、人生の中の人間関係の重要性を強く教えてくれた。僕の人生の残りを深く深く考えさせる作品だった。

## 審査を終えて

### 一般教育科 燐山 廣志

巷では日本語ブームである。街中の書店では日本語関連の書籍が山積みされている。日本経済の退潮と期を一にしているように思える。日本人としての心の拠り所が日本語に他ならない事を暗示しているようで興味深い。今年も六百篇を超す中から選ばれた学生諸君の力作を審査する機会に恵まれた。例年に比して一年生の健闘の目立った事が印象に残る。又感想文の対象とする作品に幅が出て来た事も喜ばしい現象だった。とりわけ、今年は太宰治の『人間失格』と堀辰雄の『風立ちぬ』が複数入賞作品となった事は、思春期に生きる学生諸君の感性を垣間見る思いがした。

### 一般教育科 岩本 晃代

今年も、みなさんの読書感想文を読んでいくなかで、たくさんのみずみずしい感受性に出会うことができました。

読書感想文とは、読書という行為の過程で新しい自分をかたち作り、それを自分の言葉によって他者へと発信するもの。ですから作品を「どう読んだか」ということ、つまり自分自身の考えを前面に出して書くことが大切です。そのためには作品の中に深く入り込まねばなりません。作品世界の中で起こるさまざまな出来事と心で格闘して下さい。

今年の入賞作品にもそんな真摯な読書の足跡があざやかに刻まれています。

### 一般教育科 三戸 健司

読書をじっくり楽しんだ後に、自分の感じたことを自分のことばで素直に表現した感想文は、読み手に少なからず感動を与えてくれます。今回の上位入賞者の感想文の多く

はそういうものでした。

感想文を書くために急いで読書をし、取ってつけたようにして書いた感想文は、すぐにそれだとわかるし、全体的に味気ないものになります。

真の読書は心を豊かにし、人間の生き方、人生観をも変えてしまう程の力を秘めています。今度は授業で触れた以外の書物にも積極的に挑戦してみましょう。自戒を込めて。

### 機械工学科 田口 紘一

二次審査で残った35編の中で、本年度新しく指定した図書からは『人間失格』(5編)をはじめ9編が選ばれた。『高瀬舟』、『十七歳』、『夏の庭』は昨年に続いて多く残った図書である。多分、最も多く読まれた図書であろう。今回も評価点に差をつけることに苦労した。「人間社会の中で自己主張することの難しさ」、「死に対して漠然と思っている恐怖」、「幸福とは」という課題に対して、それぞれが何らかの解決への糸口を見つけるようとしていることが読み取れる。上級生のもと積極的な参加が望まれる。

### 電気工学科 浜田 伸生

作品を読んだ多くの学生諸君が、文章、言葉として語られる話の表層ばかりでなく、文章の行間あるいは背後に存在する作者の心情や心の動きを読み取り、そこに包含される深い意味を理解しきつ分析する力を持っていること、同時にその感想を立派に文章構成できる力を有していることに大きな驚きを覚えています。優れた作品が多く、甲乙つけがたいものばかりでした。

# 図書館統計

## 平成13年度利用状況

開館日数279日

| 月       | 4月    | 5月     | 6月     | 7月    | 8月    | 9月     | 10月   | 11月    | 12月   | 1月     | 2月     | 3月    | 合計      |
|---------|-------|--------|--------|-------|-------|--------|-------|--------|-------|--------|--------|-------|---------|
| 開館日数    | 23    | 24     | 26     | 23    | 22    | 23     | 26    | 24     | 23    | 22     | 22     | 21    | 279     |
| 入館者数 総数 | 4,888 | 8,806  | 10,015 | 6,539 | 4,205 | 8,112  | 6,863 | 7,687  | 7,376 | 6,247  | 7,404  | 2,593 | 80,735  |
| (内夜間)   | (570) | (1547) | (1373) | (677) | (0)   | (1313) | (754) | (1141) | (801) | (1013) | (1022) | (59)  | (10270) |
| (内土曜日)  | (133) | (168)  | (430)  | (82)  | (0)   | (459)  | (200) | (133)  | (310) | (252)  | (172)  | (49)  | (2388)  |
| 1日平均    | 212.5 | 366.9  | 385.2  | 284.3 | 191.1 | 352.7  | 264.0 | 320.3  | 320.7 | 284.0  | 336.5  | 123.5 | 289.4   |
| 貸出冊数 総数 | 527   | 880    | 944    | 581   | 277   | 508    | 662   | 923    | 655   | 759    | 559    | 191   | 7,466   |
| (内夜間)   | (98)  | (298)  | (171)  | (109) | (0)   | (116)  | (134) | (201)  | (95)  | (163)  | (115)  | (1)   | (1501)  |
| (内土曜日)  | (48)  | (51)   | (56)   | (10)  | (0)   | (50)   | (30)  | (28)   | (57)  | (37)   | (28)   | (2)   | (397)   |
| 1日平均    | 22.9  | 36.7   | 36.3   | 25.3  | 12.6  | 22.1   | 25.5  | 38.5   | 28.5  | 34.5   | 25.4   | 9.1   | 26.8    |

## 分類別図書貸出冊数の推移

| 年度     | 総記  | 哲学  | 歴史  | 社会  | 自然    | 工学    | 産業  | 芸術  | 語学 | 文学    | *その他  | 合計    |
|--------|-----|-----|-----|-----|-------|-------|-----|-----|----|-------|-------|-------|
| 平成9年度  | 310 | 112 | 97  | 106 | 896   | 1,926 | 68  | 412 | 57 | 1,111 | -     | 5,095 |
| 平成10年度 | 625 | 93  | 111 | 78  | 1,073 | 2,327 | 96  | 347 | 88 | 1,253 | -     | 6,091 |
| 平成11年度 | 401 | 97  | 236 | 137 | 931   | 2,838 | 184 | 656 | 95 | 1,507 | 546   | 7,628 |
| 平成12年度 | 232 | 102 | 180 | 122 | 784   | 2,391 | 101 | 209 | 52 | 1,124 | 996   | 6,293 |
| 平成13年度 | 207 | 77  | 192 | 138 | 943   | 2,520 | 67  | 443 | 44 | 1,376 | 1,459 | 7,466 |
| 平均     | 355 | 96  | 163 | 116 | 925   | 2,400 | 103 | 413 | 67 | 1,274 | 1,000 | 6,515 |

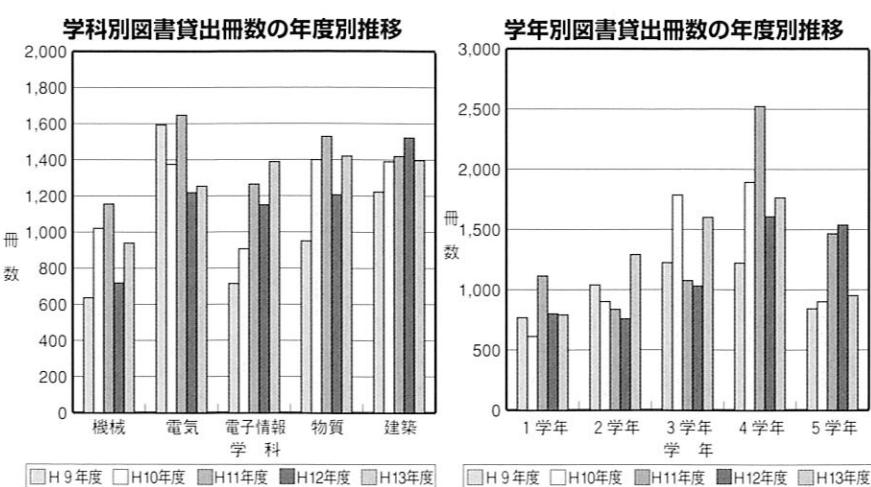
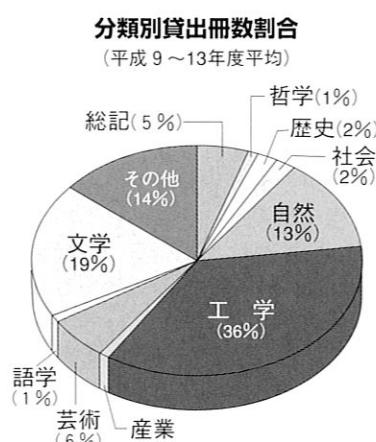
\*「その他」は、文庫・新書および雑誌の貸出冊数を示す。H.10年度以前は集計していない。

## 利用状況の推移

| 年度     | 開館日数 | 利用登録状況 |       |        |           | 入館者数   |           |       | 貸出冊数         |           |           | 1日当たりの数値 | 1人当たりの数値 |          |     |
|--------|------|--------|-------|--------|-----------|--------|-----------|-------|--------------|-----------|-----------|----------|----------|----------|-----|
|        |      | 総数     | (内学生) | (内教職員) | (*内学外利用者) | 総数     | (内夜間・土曜日) | 総数    | (内学生のみの貸出冊数) | (内夜間・土曜日) | (*内学外利用者) |          |          |          |     |
| 平成9年度  | 277  | 1,254  | 1,036 | 180    | 38        | 74,665 | 10,717    | 5,467 | 5,095        | 1,424     | 194       | 269.5    | 19.7     | 4.9(7.9) | 4.4 |
| 平成10年度 | 275  | 1,282  | 1,038 | 193    | 51        | 81,766 | 12,354    | 6,596 | 6,091        | 1,599     | 105       | 297.3    | 24.0     | 5.9(7.1) | 5.1 |
| 平成11年度 | 275  | 1,312  | 1,038 | 185    | 89        | 81,366 | 14,229    | 7,628 | 7,013        | 2,352     | 112       | 295.9    | 27.7     | 6.8(7.3) | 5.8 |
| 平成12年度 | 265  | 1,216  | 992   | 156    | 68        | 68,633 | 11,848    | 6,293 | 5,813        | 1,771     | 100       | 259.0    | 23.7     | 5.9(7.9) | 5.2 |
| 平成13年度 | 279  | 1,304  | 1,043 | 187    | 74        | 80,735 | 12,658    | 7,466 | 6,815        | 1,898     | 87        | 289.4    | 26.8     | 6.5(8.3) | 5.7 |

\* 平成9年度から一般開放を開始した。

\*\* ( ) 内の数値は、全国の高専の平均値である。



# 郷土の文化財

## 清水寺三重塔・三門

(福岡県指定有形文化財) 山門郡瀬高町本吉

愛宕山の中腹にある清水寺は天台宗寺院で、大同元年(806)、伝教大師が開いたと伝えられています。本堂・三重塔・三門等が山中に点在して修行を重んずる密教寺院の姿を示しています。また、本堂への参詣が絶えない観音靈場です。

朱塗の三重塔は福岡県内に残る唯一の近世の塔で、天保7年(1836)に完成しました。礎石上端から相輪頂部まで約26.5mの高さを有していますが、全体としてすんぐりとした構成であるため、五重塔として計画されていたという説もあります。

建築的特徴として、心柱が一階天井裏の梁上から立ち上がっていること、各階とも内部空間を設けていること、があげられます。組物は三手先出組で、最上層は扇垂木としています。

三門は本堂への長い石段の途中に建つ二重門で、延享2年(1745)に柳河藩6代目立花貞則が願主となっ

て上棟されたものです。上層に仏壇を設け、釈迦如来・文殊菩薩、四天王を祀っています。

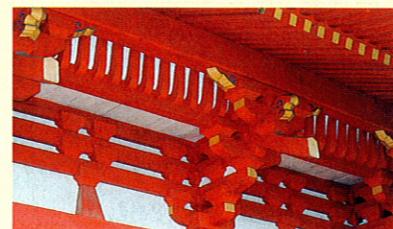
建築的特徴として、詰組・花頭窓・台輪・尾垂木・礎盤・粧など禅宗様の要素を用いながら和様で纏められること、虹梁型飛貫を柱際で支持する獅子、立花家の祇園守や花・魚・鳥を嵌めた墓股、菊を透かし彫りした木鼻など、装飾的な要素が多いこと、があげられます。そして、建設年代が比較的古く、堂々とした建築で、柳河藩の建築技術の高さを示す遺構です。

尚、麓にある本坊の庭園は元禄頃(1688~1704)に築造され、名勝に指定されています。雪舟作との伝えもあります。

(建築学科 松岡 高弘)



三門 下層詳細 墓股・獅子



三重塔 初層組物



三門 背面全景



三重塔 全景

## 編集後記

前号で「近郊の図書館」を紹介しました。本号では「近郊の博物館」を特集します。博物館は学校から連れて行ってもらうものと、勝手に決め込んでいませんか。ひとり静かに見る博物館もいいものです。大牟田は石炭の町です。大牟田に住んでいながら、大牟田の学校に通っていながら、石炭のことは何も知らない人はいませんか。ぜひ「石炭産業科学館」に行ってください。また、九州は装飾古墳の宝庫です。なかでも熊本県は日本で一番装飾古墳の多い県です。装飾古墳と言っても、あまりピンとこない人もいるかもしれません。でも、有明高専自体が古墳の上に建っているの

です。校門をくぐると、道は左右に分かれます。学寮に曲がる左上に萩ノ尾古墳があります。この古墳もまた装飾古墳です。昔、古代の人々は、岱明寮の横を流れる関川のほとりに住んで、この小高い丘に墳墓を立てたのではないかでしょうか。そんなふうに考えると、古代のロマンがよみがえてくるようです。ちなみに、図書館西側の壁はタイル張りです。目をこらして見ると、タイルで文様が描かれているのが分かります。実は、風雪にさらされて、黒ずんでしまい、判然としませんが、萩ノ尾古墳の装飾文様を模したものです。